

Special Essay

生理学講座文献資料室にて

生理学講座（脳・神経機能部門）

村井 恵良

生理学講座は脳・神経機能部門と統合自律機能部門の2部門からなる。それぞれの部門には図書室があり、さらに両部門共有の文献資料室なる部屋が2部門を繋ぐような形で建物フロアの真ん中に存在する。そのため、教科書・参考書はもちろん、最新医学や生理学に関する文献・著書なども数多く所蔵されている。

最近では書籍の電子化が進み、ネット及び携帯電話などでも書籍を閲覧できる時代となった。文献検索に関しても、図書館のホームページにある検索サイトなどを利用して非常に効率よく文献が取得できるようになった。私もネットによる文献検索に頼る日々を送っている。そんなわけで、誠に申し訳ないが、最近では文献資料室を利用する機会が減っていたような気がする。

さて、この文献資料室は本の劣化を防ぐために遮光されている。その片隅に細胞・組織観察用の顕微鏡セットが設置されているのだが、先日、久々に細胞染色結果の写真撮影のためにこの部屋に入った。ほのかに薫る少々カビ臭い紙のにおいが、今まで忘れかけていた書籍の存在を思い出させてくれた。辺りを見まわすと改めて書籍の多さに眼を見張った。生理学の専門書に *Journal of Physiology* という雑誌があるが、この雑誌に関していうと1941年刊行のものから製本されており、現在に至るまで欠号もなくずらりと揃っている。その堂々とした存在感に改めて歴史の重さを感じた。久しぶりに一冊手に取ってみると、本の温もりとその存在感がひしひしと伝わってくるような感じがした。なぜか妙に懐かしかった。幼少の頃にも同様の想いを感じたような気がする。初めてブリタニカ百科事典を手にした時だったろうか、数十巻にも及ぶ分厚い本を目の前に感じたあの圧倒感。一冊を手にした瞬間にその圧倒感は消え、本自体が

こちらに優しく話しかけてくるような不思議な感覚への変化。そしてなんとなくゆっくりと過ぎていく時間の流れ。

改めて思う。書籍のデジタル化により、私たちは情報量の多い時代への対応という面で様々な恩恵を受けている。ただ、たまにはちょっと立ち止まり、ゆっくりと考えてみる時間も必要ではないだろうか。図書館はデジタルとアナログ媒体が共存する非常に良い場所だと思う。もし、久しく本にふれていないと感じる方がいらしたら、本を手にとってみることでしばし心地よいひと時を過ごせるのではないだろうか。

